

修士 (2016 年度)

# 在日朝鮮人 1 世女性のアイデンティティの再検討 ——地域における生活の積み重ねへの意味づけに着目して——

小松 恵

## 1. はじめに

川崎桜本の在日朝鮮人 1 世女性のアイデンティティが、どのように形成されてきたのかについて検討した。従来の多くの研究において、在日朝鮮人 1 世は「祖国志向」というアイデンティティ表象によって語られてきた。同時に、1 世を多く含む在日朝鮮人高齢者については、その福祉的課題から社会的弱者として捉えられる傾向にあった。それらの中で描かれてきた在日朝鮮人高齢者の姿を内面化していた筆者にとって、地域住民の共生のために取り組んできた川崎市ふれあい館の高齢者事業に参加する、明るくて勢いのある在日朝鮮人高齢者の女性たち—ハルモニたちの姿は衝撃的なものであった。だが、そこで見たハルモニたちの姿は、単に明るく元気に生きてきたことの延長にあるわけではない。ハルモニたちは、たしかに、歴史と生活の重みを抱えているのである。そうしたハルモニたちの姿を、どのように捉えなおすことができるのだろうか。これが、本論文の問題意識である。

## 2. 先行研究の検討

先行研究において、2 世以降のアイデンティティの多様化を示すための前提として固定化されているのが、1 世の「祖国志向」という一枚岩のアイデンティティ表象である。この背景には、1970 年代以降の在日朝鮮人運動が、祖国とのつながりを志向したものから日本での生活を志向したものへと変化し、その要因として世代交代が注目されたことがあった。1 世のアイデンティティを個別に検討した研究においても、1 世の「祖国志向」は日本社会からの抑圧に抵抗するために構築されたものであるが、それゆえに現在の朝鮮半島にも日本社会にも「ふるさと」を見出すことができず、ホームレスの形態にあるとの指摘にとどまっている (金 1999; リャン 2005)。

また、1 世はすでに高齢期を迎えているが、在日朝鮮人のアイデンティティ研究では、実際には対象が高齢者であったとしても、高齢期であることそれ自体は見過ごされてきた。しかし、現代において高齢期とは、自らの人生に「意味づけ」を行い、アイデンティティを再編成してゆこうとする時期である (Erikson 1986=1990; 天田 1999 など)。そのため、1 世のアイデンティティを検討する際には、「祖国志向」の枠組みにとどまるだけでなく、日本での生活を積み重ねてきた自らの人生への「意味づけ」にも注意を払う必要がある。

## 3. 本論文の視座・研究手法

本論文では、先行研究には欠如していた次の 4 つの視点に着目した。①暗黙のうちに対象とされがちだった男性ではなく「女性」、②政治的な理念のもとに結集する運動の文脈とは異なる「生活」、③「祖国志向」という〈日本／朝鮮〉の二項対立の枠組みのもとでは不可視化されてきた過去や現在の生活の場である「地域」、④高齢期における自らの人生への「意味づけ」である。アイデンティティの考察では、主体が形成されるとき「共同性」

を重視する「エージェンシーのコミュニティ」概念（田中 2006）を援用した。研究手法としては、川崎市ふれあい館の高齢者事業2つ（ミニデイサービス、識字学級）での参与観察による記述と、1世女性2名への生活史のインタビューを取り上げ、分析を行った。

#### 4. 考察—地域における生活の積み重ねへの意味づけ

参与観察と生活史の分析から、ふれあい館が、1世女性たちの生活の積み重ねと、過去と現在の生活の場である地域への意味づけを可能にしてきたことが明らかとなった。1世女性たちは、文字の読み書きが困難であったり、夫との非対称な関係に悩んだり、商売がうまくいかない中でも、日々の実践の積み重ねから自らの学習方法を確立し、「なんとかやってきた」というような経験を持つ。ふれあい館は、そうした経験と知恵を尊重しながら、識字学級での作文書きや語り部の活動などを通して、自らの生活の積み重ねについて語り、表現する機会をつくってきた。

また、ふれあい館の働きかけにより、1世女性たちは、かつて生活していた地域を訪れることができている。そして、当時の痕跡を探し、記憶が呼び起こされ、実際に生活していた頃とは景色が変わってしまっていることへの落胆の気持ちも含めたうえで、思い出として語り、作文を書くことで、それらの地域を「ふるさと」のひとつとして表現できることもあった。現在、生活する地域である桜本が居場所であるという感覚は、2015年からの反ヘイト・スピーチ活動をきっかけに、「ふるさと」という言葉で表出されるようになった。

このように、ふれあい館の取り組みは、1世女性を中心とする「なんとかやってきた」経験—地域での生活の積み重ねへの意味づけに重要な役割を果たしてきた。こうした意味づけが可能となったのは、ふれあい館を中心に多様な他者との「共同性」が育まれ、桜本が「エージェンシーのコミュニティ」として機能していたからである。その結果、1世への「祖国志向」という一枚岩なアイデンティティ表象や、「弱者」と捉えるまなざしからこぼれおちていたものの中から、エージェンシーという主体として立ちあらわれたのは、地域における生活の積み重ねに根ざした「ハルモニ」というアイデンティティであった。

#### 5. おわりに

桜本の在日朝鮮人1世女性のアイデンティティについては以上のように捉えることができたが、他の自治体がふれあい館と同様の施設をつくったという事例はまだみられない。そのため、桜本が特殊な地域となってしまうのが現状である。しかし、この桜本の「ハルモニ」の事例を通して、自らの人生を生き抜いてきた人びとを「弱者」として捉えるだけでなく、生活経験にそった取り組みを行うことの重要性をあらためて主張したい。

#### 参考文献

- 天田城介, 1999, 「〈老衰〉の社会学—『再帰的エイジング』を超えて—」, 『年報社会学論集』12: 1-13.  
Erikson, Erik H. and Joan M. Erikson, Helen Q. Kivnick, 1986, *Vital Involvement in Old Age*, New York: Norton (=1990, 朝長正徳・朝長梨枝子訳『老年期 生き生きしたかわりあい』みすず書房.)  
金泰泳, 1999, 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて 在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社.  
リャン ソニア, 2005, 『コリアン・ディアスポラ 在日朝鮮人とアイデンティティ』明石書店.  
田中雅一, 2006, 「ミクロ人類学の課題」, 田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践 エージェンシー／ネットワーク／身体』世界思想社, 1-37.